

3. 伝統産業としての山中漆器

著者	藤井 綾
雑誌名	金沢大学文化人類学研究室調査実習報告書
巻	23
ページ	19-30
発行年	2008-03-31
URL	http://hdl.handle.net/2297/9706

3. 伝統産業としての山中漆器

藤 井 綾

1. はじめに
2. 山中漆器とは
3. 木地師について
4. 木地師比較
5. 考察
6. おわりに

1. はじめに

山中と聞いて、何を思い浮かべるだろう。山中漆器はその代表ではないだろうか。美しい蒔絵が施されたものから、木目を生かした温かみのある拭漆で仕上げたものまであり、歴史を感じさせながらも生活のワンシーンにすんなり溶け込む独特の存在感に対し、私たちは共通して「後世に残していくべき財産」だというイメージを持つだろう。しかし、それはあくまでもイメージでしかないことを今回の調査実習で知った。今回訪れた西谷地区は、山中漆器製作工程の木地挽きを生業とする木地師の方が多く存在するのだが、話を聞いていく中で私たち消費者の視点とは異なる視点を持ち、私たちとは異なる山中漆器に対する想いを持つことを強く感じた。そこに興味を持ち、調査を進めていくと、木地師の方々の間でも様々な考えがあることが明らかになり、実際に仕事として伝統産業に関わっていくことが難しい現状を目の当たりにした。そこから、この章では伝統でありながら産業である山中漆器について、職人の方々の間での意見の比較考察を行い、さらに私たちが持つ一般的なイメージと職人の方の想いとの違いが生まれる理由を明らかにする。

2. 山中漆器について

2.1. 木製漆器と近代漆器

現在の山中漆器は近代漆器と木製漆器の割合がおおよそ7:3である。近代漆器にはベークライト（以下は木地師がベークと略して呼んでいるため、それにならってベークと表記する）と呼ばれるプラスチック製品のほか、輸入品、輸入再加加工品や輸入材を使ったものも2割程含まれる。輸入品とは中国などで作られたものであるが、山中の人が技術指導を現地で直接行うために山中漆器と呼ばれている。輸入再加加工品とは中国の製品に山中の人が改めて塗りをするなど加工している製品である。

山中漆連合共同組合は近代漆器が山中漆器を世界に広め、山中を日本最大の生産地に押し上げた位置づけている。

2.2 分業制

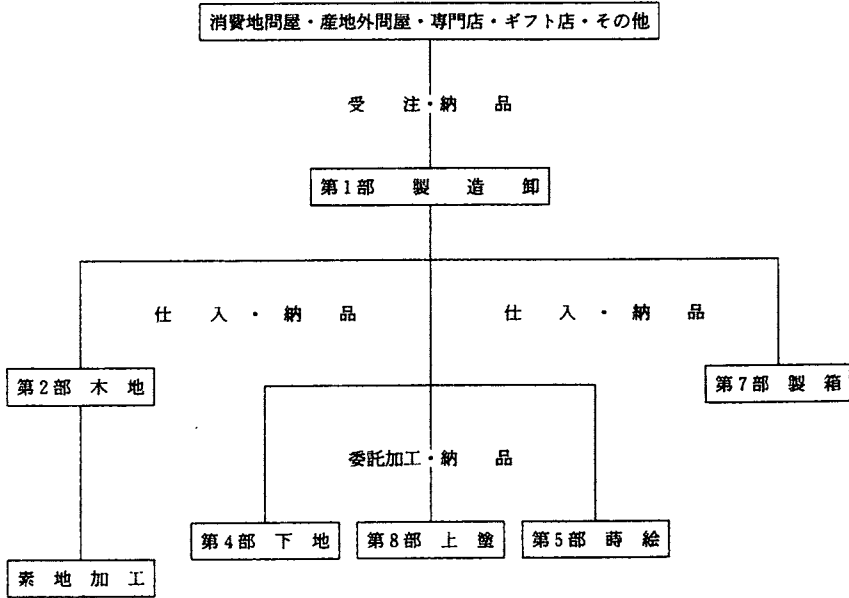
山中漆器の生産工程は完全な分業制で、山中漆器連合協同組合は生産工程に応じて第1部から第9部まで存在する。以下第1部から第9部それぞれ簡単な説明と山中に存在する事業所数を述べる。

第1部は「製造卸」	92軒
第2部は木地挽きを行う部門の「木地」	34軒
第3部はエアースプレーなどで色を吹き付ける部門の「塗装」	94軒
第4部は木製漆器の上塗りの前段階の下地つけを行う部門の「下地」	16軒
第5部は模様を描く「蒔絵」	82軒
第6部は近代漆器のベーク製品作製の部門の「成型」	22軒
第7部は箱作りの部門の「製函」	8軒
第8部は下地つけを行ったものに漆を塗る部門の「上塗」	20軒
第9部は生漆で木地をみがく部門の「拭漆」	9軒

この内、木製漆器の製造過程に関わるものは主に第1部（製造卸）、第2部（木地）、第4部（下地）、第5部（蒔絵）、第7部（製函）、第8部（上塗）である。ただし木製漆器でも値段の安いものは第3部の塗装がされていることもある。（図1参照）

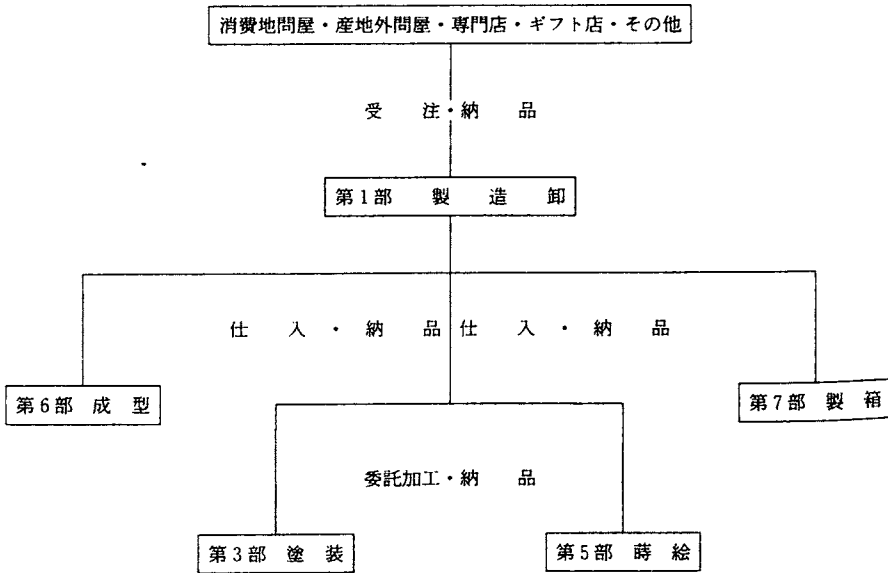
近代漆器の製作過程に関わるものは主に第1部（製造卸）、第3部（塗装）、第5部（蒔絵）、第6部（成型）、第7部（製函）である。（図2参照）

図1 山中漆器木製漆器の生産流通図



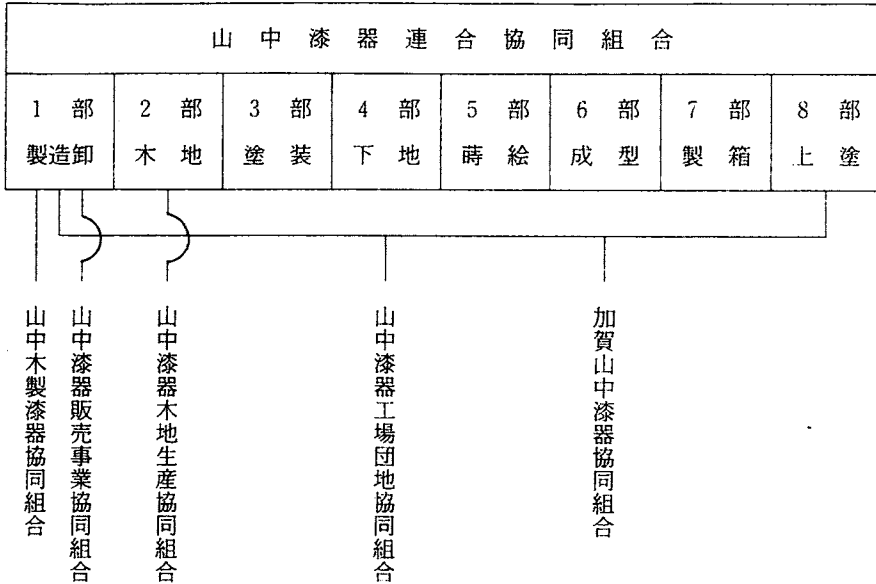
出所『山中町史 現代版』p.287 (平成7年)

図2 山中漆器近代漆器の生産流通図



出所『山中町史 現代版』p.287 (平成7年)

図3 山中漆器の産地組織



出所『山中町史 現代版』p.288 (平成7年)

3.3. 木地組合について

木地組合について、少なくとも先に述べた山中漆器共同連合組合の第2部の木地組合と、木地生産共同組合の二つが存在することがわかった。木地生産協同組合とは組合員が出資して原材料を調達する組織で、50～60年前に発足し30年前に現工場になった。私は今回の調査で、木地師の事業所数や生産額を知る上で木地組合を頼りとしたのだが、木地師の中にはどちらの組合にも属していない人もおり、統計的な公式の数をなかなか把握出来ない状況であることがわかった。そのため本章でも時折、数について述べる際に、現実を正確に反映していない場合もあるかと思うが、およその目安としてご了承願いたい。

3.4. 生産額の推移

山中漆器連合共同組合のデータによると山中漆器全体の生産額は平成元年（1989）まではおおよそ増加の傾向にあり、その後は減少の一途をたどっている。こうした山中漆器全体の生産額の推移は各工程の職人の方の収入にも反映され、ある塗装職人の方によると、以前役場勤めで給料が3万円の時代に30万円稼ぐことが出来たが、今では状況は完全に逆転したということだった。

山中漆器が分業制であることから、現在の木地部門単独での生産額の把握は可能かと調査したところ、山中の商工会や木地組合でも正確な数字を出すことは困難であるという回答だった。あ

る木地師の方によると、税金の申告からある程度推測される生産額は6千～1億ではないかということだった。

4. 木地師について

4.1. 西谷と木地師

木地師の数は山中全体で40～60名であり、この内3分の2以上が60歳以上である。最盛期では山中全体で150名ほどであり、現在は約3分の1になったということだ。ろくろの台数は約60台で、山中漆器の最盛期はその台数は2倍の約120台であった。多くの現役の木地師は、こうした木地師の減少の大部分が高齢化によるとしているが、バブル期など高い技術がなくとも作れば売れた時代の、技術のない職人が淘汰された結果とする方もいた。この事柄も含む木地師個人の見解が現れる事柄は本章5節で詳しく見ていく。

ある木地師によると、現在西谷の木地師は菅谷に10軒、下谷に2軒、栢野に1軒だということだったが、調査中私は我谷の木地師にも実際に話を聞いたことも考えると、木地師の間でも木地師の数の認識は曖昧であるようだ。木地師の数の推移として、下谷を例に挙げると、かつては下谷にあった40から30軒のうち、3分の2は木地師であったが、現在は1軒残るのみということで、木地師が減少している様子が伺える。

4.2. 木地師の仕事

先にも述べた通り山中漆器は分業制である。木地を挽く木地師、漆を塗る塗り師、模様を描く蒔絵師がそれぞれ存在する。彼ら職人は各工程で仕上げた物を彼ら自身が直接やり取りするのではない。問屋が介在し、職人は問屋からの発注を受けて生産していく。西谷の木地師の仕事はこうした問屋からの注文が全体の7～9割を占めるのが一般で、その中には他産地の問屋からの注文が含まれる場合もある。

問屋仕事は時代を反映しており、座敷で宴会をする事が多かった頃はビール・徳利袴が多く注文された。これらの制作は見習いの木地師にとって、絶好の練習の機会であり、とにかく数をこなすことが一人前の木地師になるために必要だった。しかし、時代の移り変わりと共にこれらの仕事が減少したこと、また現在見習いの木地師を一人前にする資金的余裕、つまり材料を使って練習させる余裕が師匠にないことなどから、ろくろ研修所は必要だったという木地師が何名かいた。

バブル期に京都でお茶が流行した際はお茶道具のなつめをよく作っていた。それらの注文は生活様式の変化に伴い減少し、現在はお椀や寿司鉢などの注文が多い。また木地師の仕事は木を扱う点で山と結びついているため、材料が大量にあった時代は大きな菓子器や鉢なども作っていた。

仕事内容は他に近代漆器の影響も受けているが、これについては後に詳しく説明する。

こうした問屋からの注文以外の仕事としては、他工程の職人から作品制作のために個人的に注文を受けるパターンや、展覧会への出品のための作品を制作するパターン、ギャラリーへ出す商品を製作するパターンなどが挙げられるのだが、作品製作には時間を多く費やしてしまうこと、だからといって確実に買い手が付くとは限らないため、問屋仕事が多くを占めるのである。

4.3. 近代漆器の登場

近代漆器と呼ばれる中国製の漆器とベークと呼ばれるプラスチック製の漆器の登場は、木製漆器を扱う木地師にとって大きな衝撃だったようだ。近代漆器が登場した昭和40年頃は、それに伴い仕事が減少したことを多くの木地師が実感していた。しかし、現在でも仕事量そのものは少なくないらしく、減少したと感じるのは、100から200単位での大きい注文が減ったためではないかと考える。あるいは、実際に仕事量は減少したのだが、それに伴って技術力が低かった木地師も減少し、結果的に現在残る木地師に仕事が集中したために、その木地師にとっての仕事量は変わらないのではないかと考える。

近代漆器に対し、ある木地師はこのように言っていた。「ベークなどの近代漆器は木製からすると、敵にあたるが、漆器全体から見たら、山中の問屋はいち早く近代漆器を売り出して発展していった。山中に木製だけの問屋はいないだろう」。つまり、木製漆器を扱う木地師からすると、近代漆器は木製漆器の憎い敵ではあるが、近代漆器によって山中漆器は一定の地位を得るに至ったという認識はあるようだ。また、別の木地師は「中国製の漆器の影響は強かったと思う。それに現在は中国製のものでも大分良くなってきてはいる。しかし、自分は良い仕事をするだけだ。あまり気にしていない」とのことだった。

近代漆器の登場で影響を受けたものの、それらの影響をそれほど強く意識していなかった人々が、現在も木地師としてのこっているようだ。また、近代漆器であっても、バブルの崩壊など時代の流れの影響を受け、最盛期ほどの勢いはない。現在は伝統である木製漆器が見直され、仕事量の安定を支える要因となっているようだ。

5. 木地師比較

5.1. 木地師分類

調査を進めていく中で、同じ木地師という職業でありながら仕事内容や後継者・山中漆器になどについての考えは様々で、木地師のあり方に対する志向性の相違が伺えた。そこから、本節では5人の木地師の発言に見られる志向性の比較を行う。また5人の木地師を大きく「職人タイプ」と「作家タイプ」に分類する。職人・作家という定義は実際の木地師の中でも曖昧で、一般的には職人の

中でも特に通産省による伝統工芸師認定を受けている、あるいは日本工芸会正会員であるといった資格を有している人が作家であるようだ。しかし、ここで行う分類の有意性は、志向性の相違を理解し易くすることにあるので、職人・作家という定義・区分は以下のようにする。

職人タイプ・・木地師としての技術に誇りを持つ、古風な仕事人
作家タイプ・・意欲的かつ柔軟に、山中漆器や後継者育成などについて考えている。

以上の分類に加えて、その中間として中間タイプも設定する。

さらに前提として、技術力に関してタイプ間に差はないとし、5人を見做してA氏B氏C氏D氏E氏とする。

5.2. 5人の木地師

1で分類した5人の木地師を作家タイプ、中間タイプ、職人タイプの順に挙げる。それぞれの仕事内容などには詳しく触れず、インタビューした内容から、彼らの考えが現れている部分を抜粋し述べていく。

A氏（作家タイプ）50代男性

漆器産業は分業制であるため、産業であるために各行程の職人が残ることは最低限必要なことだ。漆器を残していくことに、山中らしさという産地へのこだわりより、意志の高い人々が集まってものを作ることが重要だと考える。

漆器産業が残って行くためには儲かる産業にする必要がある。そうしなければ後継者が見つからなくなってしまう。儲からない理由は日本の工芸品を中国へ持って行ってしまったことが挙げられる。この問題を解決するためには、中国製品の単価を高くするのではなく、日本の製品の付加価値を高める必要がある。また、休みがしっかりと与えられる公務員が高い給料をもらえ、休みなく働く職人が低賃金をいう社会の仕組みを変えていく必要がある。

B氏（中間タイプ）60代男性

山中漆器は輸入品におされ、また国の政策からしてもつらい現状で、仕事をして利益が出るようにしなければ将来は見えないだろう。

バブルの頃に技術力を磨くことなく今までできてしまった人は、単価が低い中国産との製品との競争に負け、自然淘汰されてしまい、結果技術のある人々が残った。山中のろくろ分野は技術・生産ともに日本でトップだ。

漆器全体の課題は若い人にどうアピールしていくかだが、漆器というと輪島塗のイメージが

強く、山中漆器を盛り上げようにもコストがかかるため実行できない。地元の仕事は減る中で、輪島に木地を持っていくなど他産地の仕事も増やしていった。それぞれの地域でその名を冠した漆器となるが、それは関係ない。山中に仕事がないのだから他の地域の仕事をするしかない。また、漆器という枠組みより、木地業界が大前提であるため、山中のろくろをアピール出来て良い。

C氏（中間タイプ）60代男性

高齢化と跡継ぎの問題で木地師の数は少しずつ減少しているものの、山中の高いろくろ技術はなくなる。その高い技術力を活かし、山中以外の問屋の仕事もしている。他産地へ木地を出すことを嫌がる作家・職人はいないだろう。こうして、もし山中の問屋が無くなってしまっても他産地の仕事をしていける。

客観的に漆器が無くなるという人がいて、確かに職人の数は減っているが、注文が入った時に良い仕事をしていれば残っていける。仕事内容や作るものに対しては、デザインを自分なりに考えるなど、提案もしている。今まで通りのものでは成り立たないからだ。

伝統工芸士の資格の有無は個人の価値観による。これによって紹介の機会が増えるという利点はある。

D氏（職人タイプ）70代男性

中国製の漆器については、人件費のことだけを考え、漆器を中国へ持っていき、教えたことは問題だろう。企業が悪いともいえる。しかし、高い技術力を有することで、製品を作れば買手がつく。仕事や収入を得るためには高い技術を身につけることが一番必要だ。

中国産の製品も山中漆器となることは寂しいと感じるが、日本の他産地との交流が盛んだ。跡継ぎは現在おらず、技術を途絶えさせないために、これまで教えたことはあるが、本来ならば技術よりも、道具の作り方を載せた図面や、道具そのものを見て技術を盗んで欲しいところだ。今でも熱意を持って教わりにくる人ならば教える。

E氏（職人タイプ）70代男性

中国製の製品が入ってくるようになって大分経つ。当初は影響が大きく、仕事量も減ったように感じたが、より良いものを作っているから中国産より売れている。中国産に対し日本の山中の漆器という強い意思を持って、人は人、自分は自分と考え、自分が良い仕事をするだけだ。自分の納得のいくものを出し、結果はお客さんが出す。今も木地師で残っている人はプライドをもってしっかりやるという意志が強い人たちだけだ。大量生産中心にやっていた人は今となっては残っていない。

しかし、木地師の数は高齢化で減る一方。他人を雇うところは最近少ない。かつては息子に教えて一人前にするのが当たり前だったが、時代も変わって息子は息子で仕事をするようになった。親の立場で考えれば跡を継いでくれると嬉しいが、子どもは嫌がるだろう。

作家と職人に関して技術力の違いはないだろう。職人はプライドを持ってもくもくと仕事をするだけ。これはもう生き方の違いだ。

伝統は残していかなくてはいけないと思うが、大変だ。また、伝統と言っても新しい形のものを出していく方がお客さんの反応はいい。

5.3. 木地師の志向性比較

2 で見てきた5人の木地師の志向性をそれぞれ簡単にまとめる。

A 氏（作家タイプ）は山中漆器という枠を越え、漆器産業に対して客観的な視野を持ちながら、積極的に現状改善を志している。

B 氏（中間タイプ）は山中漆器の将来性を社会全体から見ている。

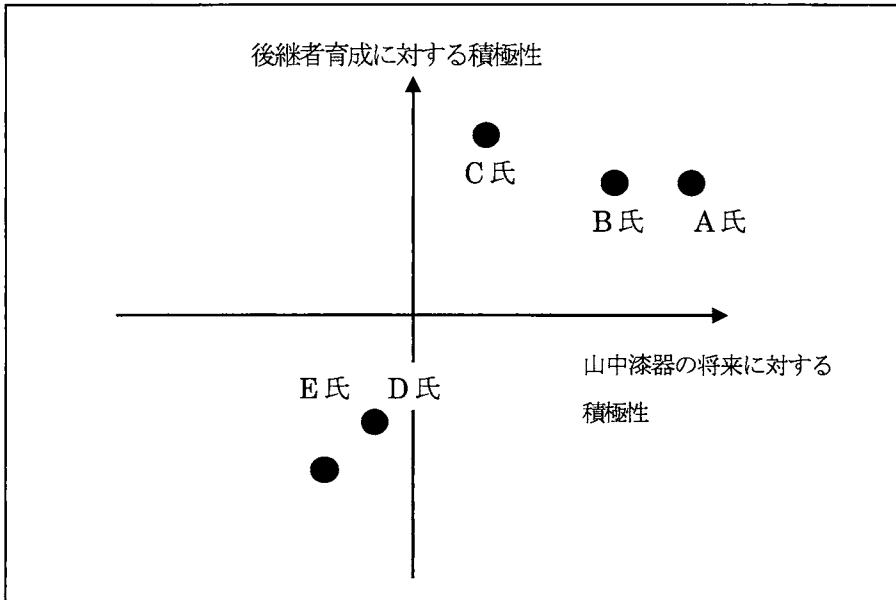
C 氏（中間タイプ）は伝統のあり方に柔軟な姿勢を持っている。後継者に関しては、育成できる環境を整えて行くべきという積極性が伺える。

D 氏（職人タイプ）は仕事の有無は技術力に依るところが大きいと見ている。後継者育成に関しては受動的である。

E 氏（職人タイプ）は木地師の仕事に対して誠実な姿勢を持って取り組んでいることが強く伺える。後継者が少なくなることに関しては、仕方の無いことと見ているようだ。

5人の志向性を比較してみると、大きく山中漆器のこれから対する考えと、後継者に対する考えで相違がみられた。作家タイプの木地師は山中漆器のこれらに対し、さまざまな視点から積極的に考えている。同時に、後継者問題に対しても、いかに後継者を育てていくか考えている積極性が見られた。一方職人タイプの木地師は、山中漆器全体に対して今後どうしていくべきかより、木地師の仕事を全うすることを中心に考えている。また、後継者育成に関しては、その仕事の大変さを実感しているからか、自ら進んで育てるという姿勢ではなかった。以下、山中漆器の将来に対する積極性と後継者育成に対する積極性を軸に、5人の木地師を、その志向性によって位置付けた。

図4 志向性比較による木地師の位置づけ



5. 考察

4節で木地師の志向性を比較してきたが、そこから木地師たちには、山中漆器という枠組みに囚われていないという共通の姿勢があることに気がついた。それを一番感じたのは、どの木地師も他産地の仕事を積極的にしている点からである。山中漆器にこだわっていたならば、山中漆器以外の仕事は出来ないはずだろう。私も、実際に木地師の方々に話を聞くまでは、山中の木地師が他産地の仕事をしていることは思いもよらなかった。では、なぜ山中漆器にこだわっていないのか。その理由を二つ考えた。

(1) 山中漆器が分業制であるから

(2) 山中漆器が伝統産業であるという位置づけが山中漆器に携わらない人々によってなされたから

まず、(1)について説明する。本章2節で説明してきた通り、山中漆器は分業制である。場合によっては、拭漆が出来る木地師が、自ら挽いた木地に拭漆をして完成させることもあるが、普通、木地師は木地挽きのみを行うため、木地師だけでは完成形には至らない。この時木地師に要求されるのは、問屋からの注文通りに木地を挽ける高い技術力である。つまり、木地師にとって重要なのは、自らが挽いた木地が最終的にどのようなになるかということよりも、高い技術力を有しているかどうかなのである。そのため、山中漆器ではない他の産地の問屋から仕事を請けるこ

とは、同時に自らの技術力を買われたということになり、好意的に見る木地師はいても、それを嫌がる木地師はいないのである。

次に、(2) について説明するが、その前に、なぜ私たち山中漆器作りに携わらない者が、木地師が他産地の仕事をしていることに驚くのかについて考える。私たちが山中漆器を含め伝統産業に対し、後世に残して行くべきものだという認識を持っているのは、伝統産業を伝統産業と定義付ける要因の一つに、その独自性をみているからである。そのため、山中漆器の木地師が他産地の仕事をしていることに、山中漆器であれ、他産地の漆器であれ、無意識のうちにその独自性が損なわれるのではないかと感じ、驚くのである。

このように、伝統産業と位置付けるためには、そこに独自性が存在する必要がある。では独自性とはどのように見出されるのか。それは、第三者の存在が前提となる。山中漆器の場合、山中漆器を制作している地域 (=山中) に、他地域からの訪問者が来て、他地域にはない山中漆器を発見し、山中にしかない山中漆器に独自性を見出す。そして、山中漆器は山中の伝統産業であるという定義がなされるのだ。

しかし、山中漆器に携わっている人にとってはどうか。山中漆器がそれに携わっていない人によって発見され、伝統産業だと位置付けられる以前から、仕事として山中漆器を制作していた。それは、山中という地域に限っていえば、数ある仕事と同様に、生活するための基盤を得るものだった。それが、他の地域に無いということが発見されたために、伝統産業となった。つまり、山中漆器に携わる人にとっては、山中漆器とは、伝統産業である前に、仕事なのだ。話を聞いた木地師も例外ではない。彼らの中で「他産地の間屋の仕事もしなくては、生活していけない」と言う人もいたが、それは、彼らにとって木地を挽くことが仕事以外の何物でもないことをよく表しているように思う。

このように、山中漆器に携わらない人は、山中漆器に対して単純に後世に残すべき財産であるという認識を持つが、山中漆器に携わる木地師たちにとっては、生活していくための仕事であることが前提だということがわかった。私たちは山中漆器を残していきたいと思っているが、そのやり方は、こうした認識の違いがあることを理解しておかなくては、成功しないだろう。

6. おわりに

今回の調査実習で西谷を訪れる前、さまざまな事前調査を通しても漆器産業に興味を持つことはなかった。しかし、実際に西谷を訪れて、一番初めに話を聞かせていただいた方から、木地の腕を見せていただいた。それを手にとった時の、羽のように軽く、そしてなめらかな手触りが強い衝撃となって私を魅了した。そして大勢の方から話を聞いて行く中で、私は木地師の方の仕事

に対する姿勢や誇り、熱意に惹かれ、この報告書も山中漆器、とりわけ木地師の方々に焦点を当てて書いてきた。実際に仕事をされている方からすると、拙いものになってしまったとは思いますが、聞かせていただいた話を無駄にすることなく、ひとまず形に残せたことを嬉しく思う。

最後に、多くの方々が突然の連絡にもかかわらず訪問をご快諾下さり、さまざまなお話をお聞かせいただいたことに厚くお礼申し上げます。